

『再稼働』を考える」

講師：平野 義尚 氏（環境活動家）

企画：郷土史同好会



【講座内容】

福島は「復興が進んでいる場所」と「取り残された場所」があります。浪江町は、県と国が総力をあげて復興のシンボルとして「道の駅」が整備され、観光客も多く訪れ「なみえ焼そば」の地域グルメも。一方では「この先帰還困難区域」の看板が立っており、かつて水田だった場所は低木林に。この地点の放射線量は0.255 マイクロシーベルト。0.23 マイクロシーベルトを超えたら除染の対象になるそうです。「お墓も避難先に移転」する人がおり、墓地も空き地に。

男女共同参画の視点のお話もありました。浜通りから避難した人たちは、車のナンバーなどで避難者だと分かってしまい、車を傷つけられたり、子どもがいじめを受けたりすることがあったそうです。特に、中学生高校生の女子生徒の中には、私たちは差別を受けているから、結婚できないのではないかと感じていた人たちもいたといいます。まったく本人たちは何も悪くないのに原発事故というのが、差別をもたらしていることもあるといいます。

また、講師からは、人類が放射性物質を無害化する技術を持たない現状に触れながら、原子力発電に伴う放射性廃棄物の処理について課題提起がありました。

原発は、一度動かすと季節や昼夜を問わず長期間運転される特徴があり、出力調整が難しいとのこと。2023年4月には、九州電力管内において原発4基が稼働する中、太陽光と風力による発電量の一部が出力制御された事例が紹介されました。

また、市民が資金を出し合い所有・運営する再生可能エネルギー事業や、協同組合による取組、地域密着型のエネルギー事業について紹介がありました。

太陽光や風力は、天気や風によって発電量が変わります。そのため、「不安定だ」と言われることがあります。しかし天気予報や発電予測、広い地域で電気を融通する送電網、そして蓄電池を組み合わせることで、再エネを安定して使うことができます。たとえば、ある地域で太陽光が足りない時には、別の地域の風力や水力から電気を送り、電気が余った時には蓄電池にためておき、足りない時に使う。こうした仕組みをスマートグリッドと呼ぶそうです。

また、省エネの重要性についても話がありました。住宅の断熱や遮熱が重要です。日本の家は、夏は暑く、冬は寒くなりやすい構造が多く、窓やアルミサッシから熱が入り、また逃げていきます。窓の工夫や風通しの改善、遮熱材の活用などの断熱対策が紹介され、再生可能エネルギーの導入とともに住宅の省

エネルギー化についても話がありました。

駐車場の上に太陽光パネルを設置する取組について紹介がありました。車の陽よけにもなり、発電もできます。地域の小さな駐車場でも取り組める可能性があります。また、畑や田んぼの上に太陽光パネルを設置する「ソーラーシェアリング」も。作物に必要な日光を残しながら、温暖化で作物が暑さに弱くなっている地域では、適度な陽よけになる場合もあります。

日本全国では、環境省試算によると、再生可能エネルギーには大きな導入可能性があることが紹介されました。また、その実現に向けて、政治や自治体、市民それぞれの役割について講師の見解が示されました。

原発再稼働を考えることは、福島を振り返ることだけではありません。これからの地域、暮らしをどうしていくのかを、私たち一人ひとりが考えることでもあります。

【参加者の声】

- ・ 福島の現状について理解が深まった。
- ・ 今後自分にできることを考えるきっかけとなった。

【主催した感想】

福島の現状を学び、次世代に向けて私たちが何を考え、行動していくべきかを改めて考える機会となりました。